

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第129号

イザヤ 65:1

平成18年6月30日

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。また御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自身と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。．．． 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。

コロサイ人への手紙 1 : 15 - 29 .

四月七日の新聞に、千七百年前の「福音書」写本、「ユダの福音書」が解読されたことが報道されました。「異端の書」として破棄されたと見られていたのが、ギリシャ語原本から古代エジプト語（コプト語）に訳されたのが1970年代にエジプトの砂漠で発見されたもので、パピルスに記された三、四世紀の本物と鑑定された写本の解読でした。大変傷んだ状態で発見されたにもかかわらず最新技術のおかげで保存、復元され、まさにこの禁断の書には知られざるイエス最後の日、ユダ像が語られていたというわけです。この書では、キリストの敵、裏切り者として知られているイスカリオテのユダが実はキリストの依頼によって人間の肉体からキリストを解放する手助けとして裏切り行為をしたという内容になっており、今後論争を呼びそうであるという記事でした。スキャンダル、波紋を引き起こすことが大好きなマスコミは「世紀の大発見！本誌独占！ユダの福音書、驚愕の記述―世界が震撼した『イエスとユダの密約』―、ユダこそは英雄、裏切り者ではなかった」というように、注目を引くキャッチフレーズで宣伝し、続いて五月の初旬には「ユダの福音書を追え」という翻訳本まで早々と登場したのでした。他方で、この五月にはダン・ブラウン著のフィクション「ダビンチコード」の映画が米国で封切りされ、真理が大きく歪められた、聖書の語らないイエス像が映像を通して多くの人たちに伝えられています。映像に登場するイエスは結婚して子どもがおり、死人から甦ることもなく、嘘で固めた教会を創立し、神性を主張することもなく．．．と全くの偽りのイエスで終始しているのですが、この映画は何と「真理を求めよ」というスローガンで市場に出されているのです。確かにダビンチコードは、秘密結社、不可解な暗殺、好奇心をくすぐる歴史的人物の秘密、一連の暗号の謎解き等が絡んだサスペンスもの、すなわち、フィクションとして受け流せばいいといえるかもしれませんが、歴史的事実に基づくフィクションであるだけに、事実を知らない者に与えるマイナスの効果は否定できないのです。著者ブラウンの意図は、歴史的、考古学的に実証されていないグノーシス派の疑似文書の記述を正当化することによって、聖書の信憑性、三にして一なる神イエス・キリストの実像、キリスト信仰の真髄、初代教会の現実性のすべてに挑戦、疑いを入れることによって真理を歪めることにあることは間違いないようです。

事実と虚構を巧みに混ぜ合わせたこのような映画や間違っただけの教えが相次いで世に出るといふことは、イエス・キリストの話題がちまたで取り沙汰されるという点では福音宣教の機会になるかもしれませんが、キリスト者の中にも惑わされる、いや、すでに惑わされている者がいるということは憂えるべきことです。もしすべてのキリスト者が神の言葉、聖書に精通し、聖霊の助けによって世の中で起こっていることを正しく見分けることができれば、どのような異端的教え、間違っただけの聖書解釈、偽預言が出回っても揺るがされることはないのですが、キリスト教界内の混乱、惑わしはすでに現実の問題で、背後で操っている暗闇の影響力は深刻です。まさに聖書の語る終末末期のこの世の状

態です。

さて、世紀の大発見とうたわれ、すでに論争を引き起こしているこの「ユダの福音書」は実は、「グノーシス派の福音書」といわれたもので、聖書の四福音書はじめ他の諸書とは内容が一致しないため、イレナエウス、ヒッポリュトス、オリゲネス、テルトゥリアヌス等初代教会の父祖たちによって正典には入れられなかった新約外典、疑似福音書（ただし、キリストの時代以前に書かれた「聖書外典（アポクリファ）」とは異なります。聖書外典は、ローマカトリック教会の公認聖書であるラテン語のウルガタ聖書では、正典として収録されています）の一つなのです。これら「グノーシス派の福音書」はどれもイエスの生涯に関し歴史的に信頼の置ける情報を提供しておらず、イエスと同世代の者が存在しなくなった二世紀以降に書かれたものであるという点で、学者たちの見解は一致しています。「トマスの福音書」「ピリピの福音書」「マリヤの福音書」「真理の福音書」はじめ五十冊余にも及ぶグノーシス派の福音書がありますが、どれもはるか後世に書かれた歴史的根拠のない思索的、類推的な意見書といった類の疑似文書で、神の靈感によって書かれた真理の書、正典（西暦一世紀に公認されて以来、今日まで千九百年に亘る公認聖書）に挑戦するかのよう内容がその多くを占めています。

ギリシャ語の知識（グノーシス）から名前を取った「グノーシス論」は早くも初代教会の時代に台頭し、その後二世紀に大きく発展した、神の奥義を知らされたと主張し、霊的特権階級を誇った者たちによる間違った教えで、『知識（パウロはテモテへの手紙の中で「靈知」として警告しています）こそ救いの道』と解いたものでした。これら間違った教えに対する警告はすでに聖書の至る所で語られており、たとえば、ヨハネは三通の手紙の中で、神の子イエスが肉体を取って来られたことを否定する異端を対処していますが、使徒パウロは、特にコロサイ人への手紙の中で、キリスト教会に忍び込んだ異端的教え、グノーシス論を指摘、邪道を正し、キリスト信仰の真理に立ち返るよう信者たちに呼びかけています。グノーシス論は旧約の律法や儀式遵守を強調したユダヤ人たちによって持ち込まれ、深奥で特別な知識（グノーシス）をたたえた哲学でしたが、パウロはコロサイ人への書簡の中で、「あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意なさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。」と言明していますが、またグノーシス論を特徴付ける教えの一つで、御使いを神と人との仲介者とみなし、優越視し、崇拝を奨励する明らかな異端と超自然的な霊的体験の重視に対しては、「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、かしらに堅く結びつくことをしません。」と警告しています。

この異端は、主張する教理とか儀式に従い修業を積み、深い知識が得られ、霊的完全の境地に達することができ、また旧約の食生活に関する掟や割礼の儀式等の踏襲が霊的成長に役立つと教えたのですが、パウロは、『「すがるな。味わうな。さわるな。」というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。』『キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。』『「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。』と、論駁したのでした。

また、(1)キリストの神性と(2)キリストの贖いによる救いの二大真理を歪めて伝えるのが異端、カルトの特徴と言っても過言ではないのですが、パウロは冒頭に引用した真理を今一度、教会に語り聞かせ、また、「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえられたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。．．．地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」と、キリストに従う者は視点を天、すなわち、神にのみ向け、歩んでいかなければならないことを説いているのです。

このグノーシス派の教えは今日流行している『神智論』、いわゆるニュー・エージ主義と非常に似ており、初代教会を荒らした異端の波はパウロの警告通り、再び、この「後の時代」（もっとも、すでに二千年前にこの時代に入ったのですから、現在は「後の時代の末期」と表現するのがより正確）に大流行の兆しを見せているのです。「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、食物を絶つことを命じたりします。．．．」（第一テモテ4：1-3）「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くて悪くてももしっかりやりなさい。．．．というのは人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」（第二テモテ2-4章）。

異端に惑わされないためには、パウロの警告を深刻に受け止め、冒頭に引用した「神のみこころに関する真の知識」に満たされ、神に由来する「霊的な知恵と理解力」により、「神を知る知識」がさらに増し加えられるようにと絶えず祈り求めていかなければならないのです。